

徳川綱誠所用 縞麻羽織について

神 谷 榮 子

綱誠所用縞麻羽織はその一端である。

さて、表題の縞麻羽織に関連して、徳川美術館に所蔵される二代光友、三代綱誠^{つななり註¹}、四代吉通所用の羽織を次に列举しておこう。名称からしても、その用布が当時の貴重な染織品であることが知られよう。また、筆者の知る限り、江戸中期以前の所用者、年代の明らかな羽織がこのように揃って所蔵されるところは他にはない。

名古屋の徳川美術館に蔵される染織品では、徳川家康所用の衣料が特に世間に知られているが、尾張徳川家代々の衣料も極めてよい保存状態で数多く伝えられており、年に二回前後の染織・服飾類陳列の折に屢々それら優品の展示されているのを見る。

年代が明らかで、仕立が当初のまゝの「うぶ」な衣料は世間には極めて稀であるが、尾張徳川家に伝えられる代々の衣料は、その点に疑問のない貴重な服飾類が揃っており、われわれ染織品、服飾類を調査・研究する立場の者にとっては得難く有難い資料群といわなければならない。

すでに筆者は上杉謙信・景勝所用服飾類等の調査・研究発表を美術研究誌上で行って来て、わが国の室町末から桃山、江戸初頭までの小袖、帷子、胴服等、服飾類、染織品の様相を究めたが、それに続く江戸前期、中期の確かな優品が尾張の徳川家に相当数揃っていることを知って、ここ二十年来、主に陳列されている服飾類を観察することにより、時に特別観覧を依頼して調査・研究を進めて来た。ここに発表する徳川

- 1 二代光友所用単羽織（花色地花唐草模様）
- 2 同 袷羽織（唐木綿葵紋染縞）
- 3 同 綿入羽織（縮緬地、菱繫ぎ、水浅葱・茶小紋、葵紋付）
- 4 同 袷羽織（茶字縞）
- 5 同 単羽織（縮緬地、菱繫ぎ、水浅葱・茶小紋）
- 6 三代綱誠所用縞麻羽織（本稿表題のもの）
- 7 同 単羽織（紺木綿縫模様）
- 8 四代吉通所用阿蘭陀木綿単羽織
- 9 同 八丈島薄羽織

昭和五十一年十一月二十七日（土）、日経小ホールにおいて開催された「東京国立文化財研究所美術部公開学術講座」において筆者は「沖繩の縞と紺」の題で、この徳川綱誠所用縞麻羽織を採りあげて考察、沖繩出来のものであらうとし、更にその繊維は芭蕉であらうと推測した。

その後、昭和五十二年一月三十一日（月）、二月一日（火）と再度の特別観覧の機会を得て調査・考察を行ったところ、その繊維は芭蕉ではなく、徳川美術館の台帳通りの麻（苧麻）であらうと観察した。その直後の二月十九日より沖繩に渡り、徳川綱誠所用縞麻羽織の四つ切に伸ばした全図、部分の写真十枚を、芭蕉布織で重要無形文化財保持者に認定されている沖繩本島北部の喜如嘉村在住の平良敏子氏を訪ねて御目につけ

たところ、部分写真の伸しを一目見て、これは芭蕉ではない、明らかに苧麻だ、と言われ、この縞も紺も沖繩ですね、と感慨深げに眺め入られたのであった。その後、沖繩本島では読谷の与那嶺貞氏、那覇市の宮平初子氏、大城志津子氏、祝嶺恭子氏、宮古島では、宮古上布専門の下地恵康氏、池間方俊氏、大里サダ氏、石垣島では八重山上布の石垣英富氏、新垣幸子氏、西表島の石垣昭子氏、竹富島の野原ウナヒト氏、有田静氏、花城ツル氏、上勢頭亨氏等、芭蕉の糸や苧麻の糸を扱う仕事の方々に写真を見ていたが、どなたも即座に「これは麻だ、苧麻だ」と言われた。「芭蕉の糸には麻の糸に見られる表面の小さな毛羽だが、このようにはない。」というのが御覧になったこれらの方々の一致した御意見であった。そして「縞柄、紺柄の雰囲気は沖繩に違いない、元禄頃にこのようなのがすでにあったのですね。沖繩で作りの島津に納めて

挿図 1 徳川綱誠所用縞麻羽織 正面 中央部分

挿図 2 徳川綱誠所用縞麻羽織 正面 右袖

いたものが、本土の徳川家にも行っていたのですね。それにしてもよく残っていた。」と感深く言われて写真に見入るのであった。

以上のような次第で、この羽織は沖繩出来の麻の羽織であることがほぼ決定的

であろう。

次に、公開講座で発表した二ヶ月後の特別観覧二日間の観察で、公開講座で発表した内容に色彩の点でも多少の相違が認められたので、ここに表を新たに示すことにする。

また、その時の調査で次のことが新たに確認された。織幅一幅に二筋、薄紅の比較の長い経緋が入っている。幅は約一センチから一・五センチで、経緋の長さが二十センチ強、羽織の丈の間に三つぐらい入っている。その横に同色の薄紅の長さが五センチから七センチと短い経緋が、長い薄紅経緋に並行して添うように走っている。

徳川綱誠所用 縞麻羽織 色名解説表

地色(経糸, 緯糸)		No.1	薄茶	7.5YR7/4	light yellowish brown
麻(苧麻)					
経	縞—麻(苧麻)	No.2	濃浅葱	2.5B3/4	dark greenish blue
		No.3	薄紅	7.5R8/6	moderate yellowish pink
	緋—麻(苧麻)	No.4	濃茶	10R2/1	dark grayish reddish brown
		No.3	薄紅		
		No.5	黄	2.5Y8.5/12	vivid yellow
緯	縞	No.6	白	N9	white
		No.7	緑	10GY6/8	strong yellowish green
		No.8	棒色	5YR7/8	moderate orange
	麻(苧麻)	No.2	濃浅葱		
		No.3	薄紅		
	緋—麻(苧麻)	No.4	濃茶		
		No.2	濃浅葱		
		No.3	薄紅		
	縞—麻(苧麻)	No.5	黄		
		No.9	赤	7.5R5/14	vivid reddish orange

比色は視感判定による。記号はマンセル値(JIS)系統
色名(I.S.C.C-N.B.Sコード)使用。

この薄紅は色が薄い上に、地色が晒し方の少い薄茶色の麻地であるため、肉眼でも見落してしまい、初回の特別観覧の時は写真撮影も行ったため、調査時間が少くなり見落したのであった。図版、及び挿図写真でもそれと知らずに見ると不詳である。注意して見ると平筆で一掃き摺ったような感じのぼかし線が見えるのがそれである。

さて、徳川綱誠は、承応元(一六五二)年八月二日、江戸市ヶ谷・鼠穴の館に於て出生、尾張・徳川家二代光友の長男である。母は御簾中で徳川三代将軍家光の女・千代姫である。歿年月日は元禄十二(一六九九)年六月五日、享年四十八(数え年)であった。^{註2}

この羽織は成人用であり、伝来に信憑性があるから、綱誠晩年所用の羽織と見てもその製作年代は元禄十二年までに出来ていたことになる。

元禄年間の羽織としても、その形態、仕立上の観察から妥当なものと認められる。縞と緋は、この種のものはわが国出来のものではこれまでになく、その縞や緋の素朴な様相が、沖繩の縞・緋の原形を見る感じである。その地裂の麻にしても、わが国の上布のように純白に晒すようなこともせず、多少は晒してはあるようだが、染めたり織ったりに支障がないためだけの精練・漂白のようである。

すでにその頃は、沖繩は島津藩の統治下にあり、沖繩で作られる麻や芭蕉は相当量が島津を通して上納されていたから、その経路からの尾張徳川家に入った裂であることは充分推測出来ることである。

その裂を当主綱誠の単羽織に仕立てるべく三つ葉葵紋を、顔料(この朱色は弁柄だと思われる。図版I及び色名解説表参照)を型で摺り込んで付けて、その後裁断、仕立てたものであろう。

挿図 5 黄色地紅格子縞黒緋文芭蕉布童単衣 尚家伝来 19世紀

挿図 3 黄色地赤緑茶黒緋文紬地童袷衣 尚家伝来 19世紀

挿図 6 黄色地黒緋文芭蕉布童単衣 尚家伝来 19世紀

挿図 4 黄色地黒紫緋文紬地袷衣 尚家伝来 19世紀

形態は現代の羽織と殆ど同形である。室町末の上杉謙信の胴服のように袖を平袖にした以外は、当時の小袖と殆ど同形というような、初期胴服(胴服は羽織のものと形のもの)の面影など微塵もない。元禄頃には、小袖も羽織も、その形を殆ど完成させていて、以後今日に至るまで形態の基本的なものは変化していない。その羽織の形態の完成した姿を、元禄期における羽織の完成した形を、今われわれはこの綱誠所用といわれる縞麻羽織に見るのである。

(形状、法量、仕立て方等)

法量は、背縫位置での丈が一・二・五センチ、衿は六三センチ、袖幅は三一・五センチ、袖丈五三センチ、袖口は左袖が二四・七センチ、右袖が二四・五センチで、何れも袖口留がしてある。襟幅は一四・五センチ、襟肩アキ×2は一八・五センチ、襟先は丸みをつけ裁ち出してある。前裾幅は三〇センチ(襟は別で、後裾

挿図 7a (t) 水色浅地格子緋文手縞地袷衣
b (f) は部分 尚家伝来 19世紀

挿図 8a (t) 花色地赤黄緑色縦縞文芭蕉布単衣 (註3)
b (f) は部分 尚家伝来 19世紀

幅四一センチ、前下り七・五センチ、襷は裾幅で二二センチ、丈は袖付より下裾まで、前が六〇センチ、後は五五・五センチ、乳(挿図1参照)は左右とも肩山より二六・五センチの位置に〇・五センチ幅のが二・五センチ長さのわなで付いている。紐は欠。袖口裂がついており、右袖は八センチ幅で肩山より下方に二九・五センチまで、左袖は七・五センチ幅で、肩山より下方に三一センチまで、袖附の長さは、右が五二・五センチ、左が五二・八センチである。

縫い方は、背縫は〇・一センチ前後のこまかい針目の一度縫で、現状は裾から二七・五センチの位置までがほころびている。背縫の折被せは、われわれがいう正常な方向(美術研究二二八号、二〇頁、挿図3参照)とは逆になっている。脇縫は袋縫がしてあり、針目は〇・二センチから〇・三センチ。袖の丸みは、縫込み分の裂を襲をとって整え、軽く糸で綴じてある。くけ縫は一センチ前後の針目。縫糸は何れもS撚白絹糸が使用してある。

裂幅は三二センチ(耳から耳まで)、密度は一センチ間に、経糸は一八本前後、緯糸は二〇越前後。

色は色名解説表に示したように、地色は薄茶色、縞緋の色は、濃浅葱、薄紅、白、緑、樺色、濃茶、黄。

重量は三三〇グラムである。

三三

この縞麻羽織の裂地の特色は、図版Iで見られるように、細かい緋糸の横縞が入ったり、その緋糸が途中で色が替ったり、緯糸に適宜、絹糸を(表照合、緯縞用に白と緑と樺色の三色の絹糸を使用している)用いたりしていることであ

挿図 10 a (f) 黄色地堅縞緋文芭蕉布童単衣
b (f) は部分 尚家伝来 19世紀

挿図 9 a (f) 黄色地堅縞緋文芭蕉布単衣
b (f) は部分 尚家伝来 19世紀

る。

経糸では、裂幅の中央と両側の三本に、濃浅葱の細い線で薄紅を中央に挟み持った目立たない優しい感じの縞を立てている。

その経縞と同じような構成の、濃浅葱と薄紅の緯縞（表照合）が、経縞のようには等間隔にはしていないが、経縞のそれと組んで、意気張らない静かなベースを作るように配されていることに気付かれよう。緯縞のそれは、等間隔ではないし、小さい単位の濃浅葱と薄紅の細縞も太さが格一的でない。そこに目立たない淡い色調の薄紅と黄色の緋糸を経緯に交叉させて地盤になる色調を、柔かく、温く整えている。

そして予め経糸としてのアクセントに準備されている濃茶緋糸を念頭におきながら、緯縞、緯緋、地緯を安排しながらの打ち込みが行われ、全体の織物意匠構成がなされて行ったに違いない。織る段階での楽しさのようなものが躍動して迫って来る感があるのである。織る段階で

指標でもある。

(一九八三年四月)

なお、本稿の調査に当り、御多用中にもかかわらず度々の調査・撮影の御便宜をおはかり下さった徳川義宣徳川美術館長をはじめ、同館の皆様、また、本文中に氏名を列記した芭蕉布か苧麻布かの御見解を賜った沖繩の技術者、専門家の方々、そのうちの幾人かの紹介の労をとって下さった宮里正子氏、比色(視感測定)を受持って下さった日本流行色協会の杉本直温・小山幸子両氏に感謝致し、厚く御礼申し上げます。

また、本稿を進めるに当り、沖繩産染織品に関連しては、日本繊維意匠センターの「日本染織文様集 第三巻」(昭和三五年)、田中俊雄・玲子御夫妻共著の「沖繩織物裂地の研究」(昭和二七年、明治書房)と「沖繩織物の研究」(昭和五一年、紫紅社)、尚裕・鎌倉芳太郎・山辺知行三氏共著の「琉球王家伝来衣裳」(昭和四七年、講談社)、鎌倉芳太郎氏著の「沖繩文化の遺産」(昭和五八年、岩波書店)、沖繩県の沖繩国際海洋博覧会・沖繩館ガイドブック「海やかみゆし」(昭和五〇年)、沖繩県工芸振興センターの「沖繩の伝統工芸」(昭和五四年)、沖繩県教育委員会の「沖繩の織物―無形文化財の記録―」(昭和四七年)、琉球文化社の「琉球の文化 二号―琉球の染織特集―」(昭和四七年)、琉球新報社の「写真集 むかし沖繩」(昭和五三年)、日本民芸館の「沖繩の美」(昭和五六年)、徳川美術館・中日新聞社の「琉球の文化 沖繩美術展」(昭和四三年)、徳川黎明会の「金鯢叢書 第三輯」(昭和五一年)等、特に資するところが大きかったので記して謝意を述べる。

註

1 「桃山・江戸前・中期の産衣十三領について上・中・下 神谷栄子論文、美術研究二六七号・二七二号・二八〇号」で徳川綱誠産衣を取扱った時、その後昭和五十一年十一月二十七日の日経小ホールでの公開学術講座での筆者担当の「沖繩の縞と緋」で徳川綱誠所用縞麻羽織を取扱った折、徳川美術館に綱誠の読みを問い合わせた折は「ツナノブ」であったのでそのように読んでいた。しかし今回「ツナナリ」が正しいとの御連絡があったので、その読みに従った。

2 徳川美術館調べ。

3 沖繩で花色というのは紅花で染色した薄紅色のことをいう。

の創作意欲も満たされている織り手の生気が感じられるのである。絵図に忠実に従って染め、或は織って仕上げ、納めなければならない時代の、そういった制約のもとに作成されたものであろうかとも想像されるが、それならばそれで、この絵図は織手の立場も楽しくさせた秀れた意匠であったと言えるであろう。

意匠の上での優作でもあり、沖繩にも、琉球王家の尚家でさえ、十九世紀以降の衣料(挿図3~11等参照)しか残されていない今日、十七世紀後半の逸品が、その古様を伝えた緋・縞文様をわれわれに呈示してくれるのは極まりない喜びである。ともすれば技巧に走って、織の技術、染の技術に素直でない文様作りやそういった文様に挑む者の多い昨今、ここに素朴な、技術に素直な立場の優品を得たことは以って範とすべしの

挿図 11a (h) 花色地紅格子文芭蕉布単衣
b (f) は部分 尚家伝来 19世紀